



YAMAGA

近代の山鹿を
築いた人たち
シリーズ

010

女性解放運動家（一八八二〜一九七二）

久布白落実



激動の明治、大正、昭和の時代を女性の地位向上のために人生を捧げた日本を代表する女性解放運動家。

当時の女性は地位が低く、参政権もなかったため、根本的な女性の地位向上を目指し、婦人参政権運動や廃娼運動に八十九歳で亡くなるまで積極的に取り組み続けた。

また、敬虔なクリスチャンであり、日本キリスト教婦人矯風会で長い間活動を続け、晩年は名誉会長に就任した。女性解放運動家としての数々の活動が評価され、藍綬褒章、勲三等瑞宝章、熊本県近代文化功労者顕彰を受章している。

はじめに

明治時代、女性の地位は低く、公然と女性が売春宿で客の相手をするのが認められていました。彼女らを公娼と呼び、その数は約五万人。全国には、五百四十八カ所の売春宿があったといわれます。また、国内ばかりでなく海外にも多くの日本人売春婦がいました。

当然、現在、日本国憲法にうたわれているような女性が政治に参加する参政権や男女平等の権利も一切ありませんでした。

そのような中、公娼（売春制度）を廃止し、婦人参政権を獲得することで、女性の地位向上に生涯を捧げた肥後の女性解放運動家がいきました。彼女が久布白落実です。

鹿央町の岩原（郷原）に生まれる

落実（おちみ）は明治十五年（一八八二）十二月十六日に、父大久保眞次郎（じろ）、母音羽の長女として、熊本県山鹿市鹿央町岩原六六三番地に生まれました。（現在も生家はその地であり、落実の従兄弟に当たる故大久保齊氏の娘である大久保とみ子さん、強さん夫婦が住んでおられます。敷地の奥には墓所があり、落実の母の音羽、妹の起実、弟の眞太郎がともに埋葬されています）

落実の誕生祝いとして熊本市大江四丁目にある音羽の実家（現在の徳富蘇峰記念館）からは、落実の誕生を祝う萩餅が届けられました。当時、熊本市から六里（約二十四キロメートル）ある山鹿の大久保家まで、豊前街道を通りそれを届けたのが、当時十四歳の徳富健次郎（盧花）でした。

父母のいっし

父の眞次郎は、山鹿市鹿央町に大久保家の長男として生まれました。家では農家を営んでいましたが、すぐれた資質と大志を持ち、明治四年（一八七二）四月、熊本洋学校より一足早く熊本城内（現在の第一高等学校南側）に開設された、いわゆる古城医学校に、熊本県下から選ばれて十六歳で入学し、マンズフェルト（生没年未詳。医師。オランダ生まれ）のもとで学びました。

医学校が廃校になると、のちに奨学金をもらい、東京帝国大学医学部となる東京医学校に通います。この中には、破傷風菌を発見し、さらに破傷風の血清療法を発見に成功した小国町出身の北里柴三郎がいきました。

経済的な行き詰まりと精神的な悩みが重なり、卒業間近というときに学校をやめ、仕事を転々としてます。しかし、新島襄の援助の下で再出発し、日本各地やハワイ、アメリカ合衆国で牧師としてキリスト教の普及に尽力しました。

母の音羽は、徳富一敬と久子（旧姓矢嶋）の四女二男の三女として水俣市に生まれました。彼女の弟には、評論家・歴史家の徳富猪一郎（蘇峰）や小説家の徳富健次郎（盧花）がいます。

父眞次郎に母の音羽を紹介したのは、眞次郎の友人であり、母音羽の弟の猪一郎（蘇峰）で、「どうだ、うちの姉は、なかなかいいぞ」といいながら写真を見せたといっています。

二人が結ばれたのは明治十五年正月のこと、父眞次郎二十七歳、母音羽二十五歳で当時としてはかなり晩婚でした。間もなくして、落実が生まれました。

注①新島襄（1843年2月12日～1890年1月23日）

キリスト教の布教家で、同志社大学の前身となる同志社英学校の創立者。本名は七五三太。福沢諭吉らとならび、明治六大教育家の1人に数えられている。

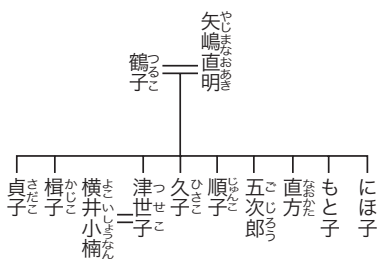
ちょっとコラム

●「落実」の名前は・・・

「落実(おちみ)」という名前は父親がどん底の生活をしている「おちめ」のときに生まれたので「落実」と名づけられたといいます。後に、父真次郎が師と仰ぐ新島襄から「子供にそんなことをしてはいけない」とたしなめられたといえます。

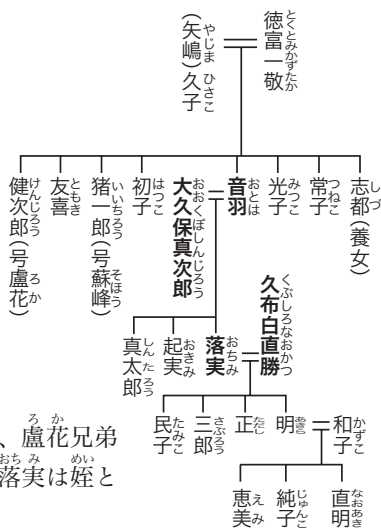
ちなみに、落実の妹は、久布白家がやや上向きになったころに生まれ「起実」と名付けられましたが、早くに亡くなったそうです。

矢嶋家家系図



※氏名は戸籍名とは限らない

徳富家家系図



● 落実と徳富蘇峰・盧花との関係

落実の母音羽は、水俣出身の徳富蘇峰、盧花兄弟の姉です。つまり蘇峰、盧花からすると落実は姪ということになります。

さらに、落実の祖母久子の妹には、教育者で婦人活動家の矢嶋榎子や、幕末の儒学者の横井小楠の妻である津世子がいます。



学生時代の落実 (1903年ごろ) 写真右

小さい頃はちゃんちゃんおばあちゃん

山鹿に嫁いだ音羽は、夫の真次郎が仕事を求めて広島尾道に行った後、養蚕、糸取り、機織はもとより、畑仕事まで農家の嫁としてよく働きました。忙しく働く母に代わって、落実の面倒を見てくれたのが、鹿央の祖母のタガでした。小さいころ落実はやんちゃで、おばあちゃん子でした。

当時、父真次郎の仕事が定まらないのを心配し、家のまわりの

片付けをしながら、「なんもかんもしやくわちやたい(めちやくちやくのこと)」「ともらす祖母のタガをまねて、二歳半になった落実も腰をかがめて、「何もかんもしやくわちやくちやく」といながら、ちよこちよこ歩いていました。

山鹿から尾道の父のもとに、落実は母と明治十八年(一八八五)に移ります。落実が三歳になる前のことで、尾道まで送ってきた鹿央の祖母との別れを、「泣いても泣いても泣き止まなかった。そのときの心持ちだけは、今もはっきり覚えています」と回想しています。

注② 徳富蘇峰 (1863年3月14日～1957年11月2日)

明治から昭和にかけて活躍したジャーナリスト、歴史家、評論家。本名は猪一郎。肥後国水俣の郷土で、横井小楠門下の俊英であった徳富一敬の長男として生まれた。熊本洋学校に学び、洋学校閉鎖後は京都の同志社英学校に転校の後退学。明治14年(1881)、帰郷して大江義塾を創設、地方新聞に執筆寄稿。

器量がよくないから続くでしよう

父真次郎は牧師となり、幾度と転勤を繰り返して、群馬県の高崎教会に移りました。落実はこの年、明治二十八年（一八九五）に十二歳で前橋共愛女学校予科へ編入学しました。このとき共愛女学校の教師をしていたガントレット・恒は、「優秀だが笑わない、可愛げのない女学生で、矢嶋榎子先生（落実の大叔母で矯風会の創始者）そっくり」と、少女時代の落実を評しています。

翌年の明治二十九年（一八九六）一月、その矢嶋榎子が校長を務める東京の女子学院に転校しました。落実は母音羽に連れられて、初めて榎子と会ったとき、榎子は、眼鏡ごしに落実をじつくり見て、「この人はあまり器量がよくないから続くでしよう」と独り言のように語ったといっています。



1903年ハワイホノルル市において
母音羽（左）、父真次郎（中央）、落実（右）

当時の女学校は、全科高等部卒業までいる人は少なく、良い縁談のある女性はたいてい中途退学をしていました。落実は七年前に高等部全科を明治三十六年（一九〇三）に卒業しました。卒業後はハワイで伝道にあたっていた両親のあとを追いつ、さらに一年後の明治三十七年（一九〇四）には両親とともにアメリカ本土のオークランドに渡りました。オークランドはカリフォルニアの学府といわれるパークレー市の近くで、向学心に燃える二十一歳の落実はずぐにパークレー太平洋神学校予科に入学しました。明治四十一年（一九〇八）に卒業するまでの五年間の生活は、昼間は神学校で学び、夜は教会の先生、通訳、雑用係を務め、両親を助けながら生活する充実した毎日を送りました。

落実はアメリカ滞在中に、同郷で熊本市出身の久布白直勝と明治四十三年（一九一〇）にシアトルで結婚しました。直勝は三十七歳、落実は二十七歳でした。

婦人解放運動のはじまり

明治三十九年（一九〇六）、落実が神学校の学生だったとき、オークランドの対岸のサンフランシスコで大地震が起きます。たくさん建物が倒壊し、火事で家が焼け、多くの死傷者がでました。オークランドはその避難地となりました。

落実にはオークランドで有名な牧師のブラウン師に通訳を頼まれ、ピーターソンという警察署長といっしょに三人で日本人町の売春宿の調査に同行しました。

調査に同行した落実は、日本人町の売春宿で、自分と同じ年齢ぐらいの日本人女性が、売春宿で過ごしているのを目の当たりにします。ブラウン牧師が、「奴隷の状況から解放してあげましよう」と告げると、日本人女性から帰ってきた言葉が「私は好きでしています。ご心配はいりません」の答えでした。

注① 徳富蘆花（1868年12月8日～1927年9月18日）

徳富蘇峰の弟で、日本文学の小説家。本名は健次郎。近年では探偵小説の作家としても注目されている。熊本バンドの1人として同志社英学校に学びキリスト教の影響を受け、トルストイに傾倒する。兄の下での下積みした後、自然詩人として出発し、小説『不如帰』はベストセラーとなった。



落実 (左)、長男明 (中央)、夫直勝 (右)
(1910年)

アメリカから帰国

これを聞いた落実は、彼女の言葉をまったく信じられず、大きなショックを受けます。「女性として妻としてまた母としての日本の女性は、倫理観は高く、日本の女性であるという心の誇りに輝いています。それなのになぜ、売春宿に日本人女性が身を寄せたのでしょうか」。落実は落胆しました。

そして、アメリカまで輸出される売春の根は、日本の社会や政府が公に売春を認め、前借でしばた不幸な女性たちを商品化していることであり、女性にだけ貞操感が求められる男女不平等の世の中であることに落実は気がつきます。つまり、日本国内の公認人身売買の制度である公娼制度の廃止なくして、何も問題は解決しないことに気づきました。この経験が落実を女性解放運動に駆り立てる第一歩となりました。

落実には四年間のシアトルでの生活で夫直勝との間に長男の明と次男の正が誕生しました。夫の日本で活躍したいという要望がとおり、大阪教会から正式に招かれ、落実たちは親子ともども大正二年(一九一三)に帰国しました。

矯風会総幹事に就任

大阪では、一生懸命に教会の布教活動に働く直勝を助け、待ち望んだ長男との同居を喜ぶ姑の夏子とともに幸せな毎日をおくります。しかし、引越して半年もたたない内に、直勝はアメリカでの無理がたたり肺結核を再発し、そのころ生まれた三男の三郎を連れて、一家は環境がよく仕事も軽い高松に転動しました。

そしてさらなる不幸が落実を襲います。それはオークランドにいた父真次郎の死(大正三年(一九一四))と疫病による次男、正の急死(大正四年(一九一五))でした。

(落実の父、真次郎の墓はアメリカ合衆国カリフォルニア州オークランドのビートモントの山中に建てられました。落実はアメリカに行く機会あるごとに、父の墓参りに行きました)

高松にいるとき、不幸続きで沈滞気味の落実にとって、唯一の楽しみは東京から送ってくる矯風会の機関誌『婦人新報』を読むことでした。この中で矯風会の公娼制度撤廃の記事にふれ、廃娼論を書き、東京の矯風会に送りました。

これがきっかけとなり、夫直勝の協力もあって落実は一家で上京します。そして、大叔母の矢嶋樞子が会長の日本キリスト教婦人矯風会の総幹事に就任しました。大正五年(一九一六)、落実が三十三歳のときでした。以来、公娼制度を撤廃するために精力的に活動を展開します。

五銭袋運動、握り飯運動

最初に実施したのが「五銭袋運動」でした。公娼制度の廃止の必要性を多くの国民に理解してもらうために行った教育活動で、運動に賛同する人たちに一口五銭の募金を呼びかけました。何万

講演中の落実
(1971年 東条会館)

という募金袋が全国の支部会員に届けられ、この運動の啓発と資金活動づくりが広く展開されました。

東京の矯風会本部に妹の矢嶋楯子と落実を訪ねてきた祖母の徳富久子は、鶴のような体から力強い声を出して「落実さん、あんな、この袋と死になさいよ」と励ましたといわれます。五銭袋運動は約十年間続けられました。これにより、募金袋の数だけで四十万、総額二十万円の募金が集まりました。

一方、各地の遊郭廃止運動の先頭に立ち、売春を斡旋する業者と戦い、講演会を開いて社会に訴え、政府、国会、県議会に廃娼請願を続けました。また、売春婦をやめた婦人の救済・保護活動にも手を差し伸べました。矯風会が昭和五年までに婦人ホームに収容した人員は十一万五百五人を数えました。(『婦人新報』一九七六年二月号)

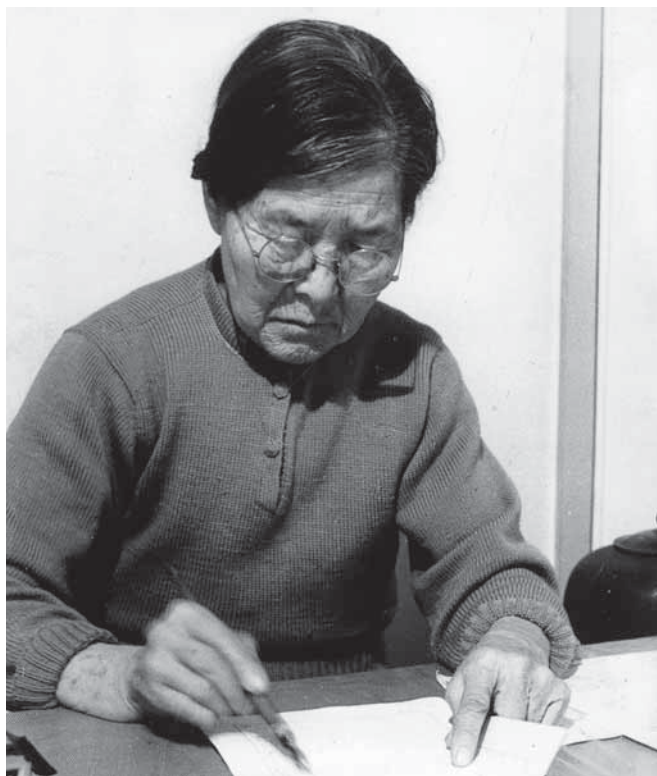
大正十五年(一九二六)には、落実が発起人となり、島田三郎や阿部磯雄らの廓清会と矯風会との合同の廃娼連盟を設立します。落実はこの連盟の財務委員長となり、「握り飯運動」と呼ばれる募金活動を行います。この運動は、「一個の握り飯をこの運動に

献するのは天下の御用だ」と強引に相手を説得するすさまじいものでした。落実が日本各地や、樺太や満州にも足を伸ばし、募金活動を続けました。この活動は廃娼運動をしっかりと陰から支えました。

婦人選挙権の獲得へ

大正九年に夫の直勝が亡くなり、その直後に長女、民子が生まれました。しかし、民子も大正十二年、幼くして急性肺炎であの世へと旅立っていきました。

落実が廃娼運動のほかに、婦人の選挙権獲得運動にも力を注いでいきます。大正十一年(一九二二)、フィラ



執筆中の落実 (1959年)

デルフィアの第十一回矯風会世界大会に出席。ここでは、廃娼運動についてスピーチを行いました。同じ年に、婦人参政権問題の研究のために、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スイスなどのヨーロッパ諸国をまわります。長女、民子の死は、そんな落実の多忙な中での出来事でした。

大正十三年(一九二四)には、婦人参政権獲得期成同盟会が設立され、落実が総務理事に就任しました。そのとき、いっしょになってこの運動を盛り上げていったのが、八十七歳まで参議院議員として活躍し、昭和五十六年(一九八一)に現職のまま亡くなった女性解放運動家の市川房枝です。

こうして、女性の地位向上のために求め続けられてきた婦人参政権は、第二次世界大戦後の民主化の中で実現しました。

注⑤市川房枝 (1893年5月15日~1981年2月11日)

日本の女性解放運動家、政治家、元参議院議員。愛知県中島郡明知村(一宮市)に生まれる。戦前、戦後の日本において、女性の社会的・政治的権利獲得を求める婦人参政権運動を主導した。

公娼制度撤廃と売春防止法の設立

廃娼（ばいしょう）（売春制度の廃止）は、明治十五年（一八八二）に群馬県から始まり、その後、落実たちの活動が実を結び、第二次世界大戦前までには二十三県、終戦時には三十五県にも達していました。これは、長い廃娼運動の成果であり、このあと、戦勝国アメリカの指令を待つまでもなく、日本が人権に目覚めていく歴史上の重要な第一歩となります。

日本が戦争に敗れると、GHQ（連合国軍総司令部）は、売春公認の根拠とされる娼妓取締規制（内務省令）を廃止します。この第一条が「十八歳未満の者は娼妓たることを得ず（十八歳になつたら娼妓（売春婦）になれる）」でした。この第一条の削除こ

そが、落実が生涯を通して追い求めてきたものでした。

そして、昭和二十二年（一九四七）に勅令九号「婦女に売淫させる者等の処罰に関する勅令」が施行され、昭和二十七年（一九五二）、政令にすることに成功しました。これにより、明治以来続いてきた公娼制度に終止符が打たれました。

さらに、昭和三十一年（一九五六）に売春防止法が国会を通過し、昭和三十三年（一九五八）四月に施行されました。

昭和三十三年四月一日午前0時、これまで何とか売春の営業を続けてきた全国の赤線地帯（特殊飲食店街）の灯りが一斉に消えました。ついに落実たちの信念がこの世から売春制度（売春宿による売春）を廃止させたのです。およそ八十年におよぶ長い道のりでした。

ちょっとコラム

●「肥後の猛婦」

ジャーナリストの大宅壮一が、昭和34年『婦人公論』に連載した「日本新おんな系図」の冒頭の章で「熊本の猛婦たち」と題し、明治以後、女性の地位向上のため闘ってきた竹崎順子、矢嶋楯子姉妹や嘉悦孝子、久布白落実など熊本出身の進歩的な女性たちを肥後の「猛婦」と呼んだことに始まっています。

そしてその女性たちの中心となったのが、熊本藩士矢嶋直明・鶴子の娘たちです。

三女順子は、横井小楠の弟子の竹崎律次郎（茶堂）と結婚した後、女子教育に力をつくし、明治三十年には熊本女学校（現熊本フェイス学院）を設立しました。四女の久子は徳富一敬と結婚し、蘇峰や蘆花を育てながら禁酒活動に携わり、順子や妹の楯子の活動を支えました。

五女の津世子は横井小楠と結婚し、明治維新の立役者小楠を支えた女性です。六女の楯子（勝子）は東京ではキリスト教女学院（現女子学院）の校長などを務め一夫一婦制を国会に進言したり、ワシントン軍縮会議に出席するなどグローバルな活動を続けます。そしてこの女性解放の運動は、久子の孫で、楯子から教えを受けた久布白落実にしっかりと受け継がれて行きました。



日本婦人代表団 団長として中国を訪問。
周恩来（前列、中央付近の男性）の右が落実（1957年）

年表 History

元氣いっぴょうのおぼやちゃん

久布白落実は、小さな体にフアイトをたぎらせて最後まで女性の地位向上のために生きぬいた、個性豊かなユニークな女性でした。

重い大きなくたびれたカバンがトレードマークで、中には本やペンやインクビンが常時ははいつており、少しの時間でも無駄にせず、ゆれる汽車や船の中でも、原稿を書き、手紙を書き、本を読むという勤勉ぶりでした。粘り強い活動の原動力は「朝の祈り」にありました。彼女は毎朝、聖書を二節づつ、日本語のほかギリシャ語、英語、ドイツ語、中国語の五カ国語で読み、ノ

トに書き写して祈りました。そして、八十歳になつて神学校に入学し、八十三歳で牧師の資格試験に合格しました。また、晩年は性教育の普及にも力を注ぎました。

そして、多くの人に惜しまれながら、落実は、昭和四十七年（一九七二年）二月二十三日、心不全のため八十九歳十ヶ月で生涯を閉じました。（お墓は東京の雑司が谷霊園にあります）

その後、女性の地位向上のための彼女のこれまでの取り組みは、多くの人たちに受け継がれ、男女共同参画社会実現に向けたさまざまな取り組みが行われるようになりました。

明治十五年 （一八八二）	熊本県鹿本郡米野岳村郷原にて牧師の大久保真二郎、音羽の長女として生まれる
明治十八年 （一八八五）	父真二郎の宣教活動により広島県、埼玉県、群馬県と移り住む
明治三五年 （一九〇二）	前橋共愛女学校予科を経て東京の女子学院高等科を卒業
明治三三年 （一九〇三）	両親のいるアメリカへと渡る
明治四二年 （一九〇九）	アメリカ太平洋神学校卒業
明治四三年 （一九一〇）	久布白直勝と結婚、シアトル市教会に奉職 滞米中に日本人移民の実情を見て廃娼問題に目覚める
大正二年 （一九一三）	日本へ帰国、大阪教会に奉職
大正五年 （一九一六）	日本キリスト教婦人矯風会からの誘いがあり東京へ移り住む 大阪飛田遊郭新設問題に反対し、公娼廃止運動に専念する
大正七年 （一九一八）	東京市民教会を創設
大正一〇年 （一九二二）	婦人参政権問題研究のため欧米におもむく

大正四年 （一九二五）	婦人参政権獲得期成同盟が発足し、総務理事に選出される
昭和三年 （一九二八）	世界宣教大会日本代表としてエルサレム会議に出席 帰途に北欧、ソ連を経由し売春問題の研究を行う
昭和十年 （一九三五）	公娼廃止後の対策研究のため、内務省、文部省の囑託としてニューヨークなど北米各地を訪問
昭和二〇年 （一九四五）	改正衆議院議員選挙法公布により、女性の国政参加が認められる
昭和二八年 （一九五三）	売春禁止法制定促進委員会を結成し、委員長として活躍
昭和三年 （一九五〇）	売春防止法が衆参両院全会一致で成立
昭和六年 （一九五三）	売春対策国民協議会会長に就任、売春防止法の全面実施を要求
昭和三年 （一九五八）	売春防止法の罰則適用の取締規定が施行され全面実施される。
昭和七年 （一九六二）	日本キリスト教婦人矯風会会長に就任。
昭和六年 （一九七一）	日本キリスト教婦人矯風会名誉会長に就任。
昭和七年 （一九七二）	八十九歳で永眠 墓は東京雑司が谷霊園

近代の山鹿を築いた人たち 010

女性解放運動家 久布白 落実

平成 21 年 3 月 発行

山鹿市教育委員会 教育部 文化課
〒861-0541 熊本県山鹿市鍋田 2085(博物館内)
TEL 0968-43-1691

参考文献・ご協力頂いた方（敬称略）

- 『廃娼ひとすじ』中央公論社
- 『近代熊本の女たち（下）』熊本日日新聞社
- 『くまもとの女性史 本編』くまもと女性史研究会
- 大久保強・とみ子さん（山鹿市鹿央町）
- 栗木純子さん（京都市）
- 徳富蘇峰記念館（熊本市）